



よつば会だより

2018年11月号

発行:NPO法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

11月を迎えました。朝夕はめっきり冷え込むようになり、今年の夏の暑さが懐かしさえ思われます。季節の移り変わりは見事に例年変わりなく、紅葉の便りも届くようになりました。庭の野菜も次第に大きくなり、毎朝野菜の間引きをして朝食の味噌汁の具にしています。チンゲンサイ、小松菜、春菊、かつなお、サラダ水菜など日替わりメニューです。6時半ごろから庭に出て20分ほどの作業ですが、寒さが身に沁みます。でも、楽しい日課です。



おのみち福祉まつりにバザーで参加



10月21日に第47回おのみち福祉まつりが総合福祉センターで開催され、よつば会も日用品・衣類などのバザーで参加しました。朝8時から販売の品々を会場に持ち込み、テント1張りのスペースに陳列しました。福祉まつりのバザーには、よつば会が発足した平成21年から参加していますが、例年使用が認められていたのはテント半張りのスペースで、つり下げた衣類などの品定めをしてもらうのも窮屈な状況でした。それが今年はテント1張りを与えられ、つり下げた衣類の両側からゆっくり見てもらうことができました。バザー参加の団体が今年は少なかったようです。オープニングセレモニーが終了した9時半過ぎから販売開始、例年ならどのテントの前も多くの人の集まりが見られたのですが、今年はさほど多くの人は見られませんでした。それでも午前中はよつば会のテントにも途切れることのない程度の来客があり、衣類やバッグ、動物のぬいぐるみなどが期待以上に売れました。とにかく安い値段をつけての販売で、来客の目を引いたのでしょう。参加した意義ありの一日でした。バザーには会員の方々から多くの品物の寄付をいただき、本当にありがとうございました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。



～和やかな雰囲気～ 10月も当事者との交流会を開催



10月14日に、当事者との交流会(昼食会)をサロンよつばで行いました。参加者は当事者8名、よつば会会員4名でした。参加者は午前10時頃からサロンに顔を出します。多くはお互いに顔なじみになっている参加者なので、コーヒーとお喋りを楽しみながら昼食を待ちます。この日の昼食メニューはカレーライスと野菜サラダ、会員の男性が料理の腕をふるいます。11時半過ぎに昼食ができあがりしました。早速参加者全員で食卓の準備、スプーン、箸、紙コップ、水のペットボトル、ドレッシングをテーブルに並べ、ご飯を皿に盛る人、カレーを盛る人、それをテーブルに運ぶ人と役割分担が自然にできていきます。「いただきます」を合図に食べ始めます。食欲旺盛なある当事者は、早々にカレーライスを平らげてお代わりを自分で取りに行きます。食べ終わるとすぐに帰る当事者もいますが、多くは食後も1時間あまり再びお喋りを楽しんでから帰途に着きます。

この昼食会は毎月1回、原則第2日曜日に行っています。作業所などに通っている当事者は、日曜日に行くところのない人が多く、そうした当事者が集うことができる場所として行っています。100円を徴収していますが、お代わり自由の食べ放題です。この食事を目当てに参加している当事者達ではありませんが、食事のおいしさでやってきているところもあります。会員男性が作る昼食はいつ食べてもおいしい味です。誰でも参加できる昼食会です。家からあまり出ることのない当事者の方も、一度昼食を味わってみてください。

10月の活動報告

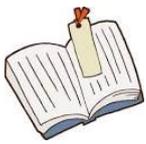
- 14日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 21日 おのみち福祉まつり (総合福祉センター)
- 24日 家族のSST (市民センターむかいしま)

11月の活動予定

- 11日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 28日(水) よつば会家族教室 (市民センターむかいしま)

*「サロンよつば」は毎週水・土にオープンしています
AM10:00～ 気軽にお越しください





～精神障害をもつ人のための～ 冊子「親なき後に備える」を読んで ～その5～



よつば会だより今年の4月号の「冊子『親なき後に備える』を読んで」と題した記事に、冊子の発行のねらいを書いた「はじめに」の全文を掲載しました。その後よつば会だよりで、この冊子の内容の部分的な紹介を3回にわたって記事にしました。よつば会家族教室で親なき後のことを話し合う材料として提供しようと考えてのことです。しかし、今回を最後にそろそろ冊子の内容から離れようと思います。そこで今回は冊子に対するまとめのようなものを書いていきます。親なき後問題から離れるということではありません。

この冊子のねらいを端的に表現している「はじめに」の文章の一部を再提示します。

「親なき後をみんなで話し合うきっかけにこの本を使っていたとしても、すべての不安が解消するわけではないかもしれません。しかし、この本の中にはさまざまな具体的な知恵が詰まっています。いろいろなヒントや自分にもできること、今しておいた方がいいことや、一人で考えているだけではどうにもならないことについて、行動を始めるきっかけになってくれればと思います」

冊子のタイトルは「精神障害をもつ人のための 親なき後に備える」となっています。上に示した「はじめに」の文章も、精神障害をもつ人に語りかける表現になっていますが、そのまま親にも通用する内容でしょう。そして、最大のポイントは「**行動を始めるきっかけになってくれればと思います**」というところでしょう。

よつば会だより先月号に、「親なき後はお金より、子どものことを気にかけてくれる誰かさん・人を遺すことをめざしましょう」という文章を書きました。この表現は、お金を遺さなくてよいということではなく、お金を遺す必要はあるが、それ以上に人を遺すことが必要だということだと思います。人を遺すとは、親なき後当事者が頼っていくことができる人とのつながりを作っておくということでしょう。このつながりも行動を始めないと作ることができません。具体的にどのような人とのつながりを作っておくかは、よつば会だより先月号に書きました。生活支援センターの相談支援専門員の人や、作業所の職員さん、ヘルパーさんや訪問看護の人などです。しかし、これらの人たちも何の行動もとらない人にはつながってくれません。例えば、相談支援専門員は障害者が障害福祉サービスを利用したいときに、地域生活支援センターなどの相談支援事業所に相談に行くことでつながりが始まります。相談に行かなければ何も始まりません。しかし、子どもが外とのつながりを持つとしないとき、親もなかなか相談にでかけようという気になれないでしょう。

そんなときに助けになるのが尾道市障害者サポートセンター「はな・はな」です。「はな・はな」は障害者のあらゆる相談を受けてくれます。例えば、親が子どもにヘルパーさんをお願いしたいと考えたとき、どこにヘルパーさんを派遣してくれるところがあるかを聞きに行くような相談でも「はな・はな」は受けてくれると思います。その相談をきっかけに親が「はな・はな」とつながり、将来子どもが困ったときに「はな・はな」に相談に行くことができる状況を作ることにもなるでしょう。「はな・はな」は親が**行動を始める最初の窓口**になってくれる存在です。

以前のよつば会家族教室で親なき後問題で話し合っていたとき、ある母親の参加者が「親なき後のことを考え出すととてもしんどくなる」とつぶやいていました。そうだと思います。考えなければならぬことと思いつつ、むしろ触れたくないという思いになるような重い問題です。一人で考えていては前に踏み出す元気が湧いてこないでしょう。よつば会家族教室がその元気を少しでも生み出す場になればと考えています。